荒廃をもたらす忌まわしき者

キリストは警告しました。「預言者ダニエルによって語られた、荒廃をもたらす忌まわしき者が、聖なる地に立っているのを見たなら（これを読む者に理解させ）、その時ユダヤにいる者達を山に逃がしなさい...なぜならその時、世の始まりから未だかつて無く、二度と起こりえない大いなる艱難が到来するからだ。それらの日々が短縮されなかったら、誰一人として救われる事はないだろう。」（マタイの福音書２４章１５－２２節）　明らかに、「荒廃をもたらす忌まわしき者」の到来は、大いなる艱難の始まりを意味する最も重要な出来事です！しかし、それは一体何なのでしょうか？そして、それは何処で起きるのでしょうか？誰もしくは何を象徴するのでしょうか？我々がそれを目撃するのはいつなのでしょうか？マタイは「これを読む者に理解させ」と警告しました。ですから神は私達に、未来の歴史で最も重要な出来事の一つを無視するのではなく、キリストの意図した事を理解する事を求めておられるのです。

ガーナー・テッド・アームストロング 著

キリストの「荒廃をもたらす忌まわしき者」という奇妙な警告は、文字通り「荒廃をもたらす者の憎悪」を意味し、専門家達の間では、エルサレムを破壊または「荒廃させる」者によって、聖地に祭り上げられる偶像、あるいは偶像崇拝の道具であると意見が一致しています。

「忌まわしき者」とは神が忌み嫌う何かであり、ヘブライ語の **Shakaz** に由来します。**Shakaz** とは、神の代わりに崇拝される人か物といった偶像を意味します。

キリストはダニエル書に書かれているものと同じものについて語っているのだとはっきり仰りました。ダニエルの預言に「忌まわしき者」という言葉は度々現れます。ダニエル書９章２７節や１１章３１節、１２章２節等が例として挙げられます。これらの書物は忌まわしき者の正体を象徴的に解き明かしています。

ダニエルの預言について、キットはこう言っています。「これはアンティオコス・エピファネスが神殿を汚した事の預言であったように見えます。彼は焼かれた捧げ物の

祭壇の上に偶像崇拝の祭壇を建て、その神殿が奉仕する神ジュピター・オリンポスに汚れた物を奉げたと言われています。」（ジョン・キットの **Encyclopaedia of Biblical Literature** 第１巻 ２２ページより)

ダニエルは獣の１０本の角の合間に生えてくる「小さな角」について書いています。獣は政府または支配者の 象 徴 であり、それは３人の王を倒し、ついには神聖ローマ帝国の７人の指導者の上に君臨する事になるとされています。この「小さな角」については後に更に詳しくお話しましょう。

荒廃をもたらす忌まわしき者とそれをもたらす者について、ダニエルはこう書いています。「然り、彼は軍勢の長にまでのし上がった。彼によって日々の供物は廃止され、その 聖地は失墜させられた。」(ダニエル書８ 章 １１節)

The Critical and Experimental Commentary はこう語っています。「確かに彼らの大切な物は奪われたが、厳密にはアンティオコスによって「失墜させられる」事はなかった。それは、もっと大きな事態が未来に起こる事を意味する。アンティオコスは数年間、日々の供物を禁じた。ローマ人にいたっては、それを長年禁じ、神殿を「失墜」させた。そして、国内の信仰に欠けたユダヤ人が神殿を再建し、モーゼの儀式を取り戻した時、第４の王国である反キリストは、ローマと結託して 再 び同じ事を繰り返すだろう。」（ファウセットの **Emphasis mine** 第４巻４２７ページより)

アンティオコスの支配が紀元前数百年前に起こった事を 考 えれば、彼の神殿への冒涜行為が、終 焉 の時を語ったダニエルの預言の 前 兆 でしかなかった事は明らかです。（ダニエル書１２ 章 ４－１１節）

二番目の 前 兆 はマタイの福音書２４ 章 １５節のキリストの警告の少し後に起こりました。ティトス軍による エルサレムの破壊がそれです。「これは高い可能性で、ユダヤ人が偶像とみなすものに敬意を表わすイメージを掲げた都市への、ローマ軍による侵攻の事であると思われます。ローマ軍の予想外の撤退と困惑は救 世 主の預言を 心 に留めた者達に、預言に含まれた命令に 従 う機会をあたえました。（ 注 ：マタイ書２４ 章 １６節の『山へ避難せよ』というキリストの警告の事）」（キット第１巻２２－２３ページより)

他にも、後に皇帝ハドリアンによって成された、更に詳細に富んだ聖地の冒涜もありました。ハドリアンはユダヤ人を侮辱する事を学び、彼らが忌み嫌う 猪 の像を、エルサレムの廃墟の上に建設されたベツレヘムゲートの上に据えた（**Euseb. Chron., 1 ,i. p. ４５, ed.１６５８**）。そしてハドリアンはユダヤ教の教会の要地にジュピター・オリンポス神の神殿を建て、自らの肖像を最も聖なる地の一部として据え置いた。（**ibid**、第１巻２３ページより）

長き歴史の中で起こったこれらの忌むべき事柄は、キリストの終末の預言にはあてはまりません。キリストのオリヴェットの預言の時間設定をもう一度思い出して下さい。

「ですから、荒廃をもたらす忌まわしき者が聖地に立ちはだかるのを見たら、エルサレムにいる者達を山へ逃がしなさい。なぜならその時、この世の始まりから今だかつて無く、そして二度と起こらない『大いなる艱難』が起こります。それらの日が（神の啓示や聖なる介入、疫病、キリストの再来などによって）短くされなかったら、誰一人として救われる（生き残る）事はないだろう。しかし、選ばれし者達の為に、その期間は縮められるだろう。」（マタイの福音書２４章１５－２２節）

なかったら、誰一人として救われる（生き残る）事はないだろう。しかし、最後の冒涜が「聖なる地」で引き起こされる事についての警告は、大いなる艱難の始まりに直接関連しています。その特徴の一つに恐ろしい諸聖人の殉死があります。（ダニエル書７章２０－２１節とマタイの福音書２４章９節）

覚えておいて下さい！「これら全てが悲しみ（艱難）の始まりなのだ。」

大いなる艱難とは何なのでしょう？

キリストは、艱難とは歴史上他に類を見ない時であると言いました。ダニエル書にはこう記されています。「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。そして、艱難が訪れるだろう。国が始まって以来、かつてなかったほどの艱難が。しかしその時、あの書に名が記されているお前の民全ては救われるだろう・・・」（ダニエル書１２章１節）

そのような事が二度も起こるはずはありません。それは、干ばつ、飢饉、伝染病の流行や、恐ろしい殺傷兵器の戦争での使用といった、文明が始まって以来起きた最悪の「事態」を凌駕するものなのですから！

でも待って下さい。ダニエルは「そしてその時…」と言っています。（ダニエル書１２章１節）　一体「どの」時なのでしょう？各章を隔てる間が、ダニエル書１１章４０節を一貫的に考え理解する事の妨げになっているのです。ダニエル書１１章４０節から４５節までの５節を注意深く読んで見て下さい。

「南の王」はその昔、エジプトの王プトレマイオスとされてきた。それはシリアに戦争をしかけたファラオに比べて少し小さめの王朝でした。シリアとエジプトはアレキサンダー大王の死後残った四つの小国の内の２つでした。（ダニエル書１１章４節）「北の王」は結果的に、典型的な荒廃をもたらす忌まわしき者を招きよせた、アンティオコス・エピファネスと同一の者とされました。

しかし、預言は明確に「終焉の時」という歴史上唯一つの時を示しています。（ダニエル書１１章４０節）

従って、プトレマイオス・ソーテールやアンティオコス・エピファネスは、この終焉の預言を実現するであろう二人の指導者を、歴史的に表した典型でしかないのです。

おそらく「南の王」の役割を果たす人物はアラブの指導者でしょう。この者は、今に分かるように、聖書の獣と同一の「北の王」に対して「圧力をかける」でしょう。「圧力をかける」と言う表現は武力行使とまではいかないものです。政治的行為でしょうか？石油禁輸もしくはヨーロッパや世界のエネルギーの途絶か何かでしょうか？サダム・フセインのクウェート侵略、そしてその結果起こった約３０カ国からなる軍事力のペルシャ湾での集結の為、多くの人がサダムこそ「北の王」または「南の王」の役割を持つ者だと考えがちです。

確かに、サダム・フセインは他の国に「圧力をかけて」います。しかし、彼は「北の王」と呼ばれる誰か、もしくはその役割を今日果たしている、政治的または軍事的な指導者に対して「圧力をかけて」いますか？

答えは「ノー」です。フセインはアメリカ合衆国やイギリス、フランス、ドイツ、ソビエト連邦、イスラ エル、日本、サウジアラビア、そして、全世界に「圧力をかけて」いるのです！サダム・フセインの行動に対する反応は、北の勢力によるイスラエル、エジプト、そして他の近隣諸国の制圧ではなく、何十万人もの軍隊によるサウジアラビアへの侵攻です。

「北の王」の対応は経済制裁を長引かせる事やペルシァ湾での戦争ではなく、イスラエ ルやエジプトを含めた地域の「多くの国々」を 雷 の様に攻め入っていく事である事にお気付き下さい。（ダニエル書１１章４０－４２節）

現在の危機下において、イスラエルに侵攻すると脅しているのはヨーロッパやアメリカ合衆国ではなく、イラクのサダム・フセインです。ダニエル書の１１章４０から４５節を注意深く学んで、有り得ない結論に飛びつく人々に振り回されたり、「アルマゲドン」が近いなどとヒステリックになったりし ないようにして下さい。

イスラエルとエジプトは終焉の時、「北の王」によってどちらも占領されています。ダニエル書の１１章４０から４５節は、「北の王」がイスラム教の指導者である可能性を真向から否定しています。なぜなら、エジプトはイスラム教の国であるだけでなく、その中でも最大のイスラム教信者数を誇る国であるからです。エジプトはアラブ国家で現在キャンプデ ービッド合意を観察していますが、それでもエジプトは他のアラブ諸国と宗 教や共感する思いを糧に結束を固め、イスラエルの「占領区域」からの武力撤退を 働 きかけています。エジプトを他のアラブの国が占領する事はありえません。エジプトは常にゲルマン勢力であった「神聖ローマ帝国」の最後の 砦 なのです！北の王とは預言に出てくる最後の 獣 の事なのです。

さて、この北の軍事勢力はいつイスラエルになだれ込んでくるのでしょう？ダニエルは「終焉の時」と言っています。そして、第１２章の一行まで読み進んでいくと、「その 時」大天使長ミカエルが立ち、国が始まって以来、かつてなかったほどの艱難が始まるというダニエルの預言が見られます！言い換えると、それは大いなる艱難の事です。つまり、北の王がパレスチナ に侵攻するのと時を同じくして大いなる艱難が始まるのです。

キリストの、荒廃をもたらす忌まわしき者についての警告は軍隊によるパレスチナへの侵攻も含んでいました。それらの軍隊はダニエル書の１１章４０から４５節において、北の王の軍隊として記されています。キリストはこう言いました。「そしてエルサレムが軍隊に包囲されているのを見たら、かの荒廃が近い事を知りなさい。」（ルカの福音書２１章２０節)

誰にこの大いなる艱難は降りかかるのでしょうか？

キリストはこう警告しました。「その時（荒廃をもたらす忌まわしき者が現れた時）ユダヤにいる者達を山へ逃がしなさい…」キリストはこうも言いました。その非難は緊急を要し突然やってくるので、誰も衣服や家具、また食べ物でさえも取りに戻ってはいけないと！キリストはこう警告しました。「屋根にいる者に自分の家から物を取りに降ろさせてはいけない。」

そして「畑にいる者にもまた、服を取りに家に帰らせてはならない」と。（マタイの福音書２４章１６－１８節）

この警告に該当する人達は間近に迫った攻撃を週刊誌で読んだりする事も、夜のニュースでそれを何ヶ月の間見る事もないでしょう。なぜならそれは驚くべき速さで「突然」やって来るからです。キリストが想定した場面は、男が畑で仕事をし、妻が屋上で洗濯を干している様な日常的な風景でした。

しかし突然、誰も予想すらしない時に、エルサレムの周りには、侵攻する軍勢が現れるのです。

キリストの時代のエルサレムでは、民家は隣り合って軒を連ねていました。屋根は平らで、胸壁もあり、そこでは人々が談笑したり、洗濯物を干したり、子供達の遊び場として使われたり、暑い夜には寝床となる事もありました。一般的に、家族は仮設住居を木の葉や枝で建て、タバナクルの宴会の間はその小さな小屋で暮らしました。

ラビ達は「屋根の道」という物を書き記しています。人々は連なった屋根の上を歩き、家の中に入る事なく街道に降りていました。キリストは彼の警告の中でこれに言及しています。

ダニエル書の預言では、大いなる艱難は大天使ミカエルが立った時とされています。ミカエルは、イスラエルの王子である大天使として「汝の王子ミカエル」と認識されています。（ダニエル書１０章２０、２１節）第１２章では、ミカエルは「イスラエルの子供達」に味方すると記されて います。彼らはイスラエルの貴族であったダニエルの民の子孫です。

キリストの預言にはその出来事が中東とパレスチナのエルサレムで起こるとはっきりと記されています！しかし大いなる艱難は世界規模のものとなるでしょう。なぜなら、キリストとダニエルが共に、それは「この世の始まりから今だかつてない」ものとなると言っているからです！彼はまた、この世界恐慌が神によって短くされなかったら、男女子供を問わず、誰一人生き残る事は無いとも言いました。（マタイの福音書２４章２１－２２）ですから、エルサレムの出来事は艱難の始まりの兆しを示していますが、艱難はパレスチナとエルサレムの都市に限られているわけではないのです。

しかし、キリストの警告により、大いなる艱難が、荒廃をもたらす忌まわしき者の出現によって、エルサレムとパレスチナで始まるという事がはっきりと分かります。さらに詳しく言えば、その「忌まわしき者」は神殿に現れるのであり、そのような神殿はまだ存在していません。キリストの言い表した大災害はエルサレムそして現在「イスラエル」と呼ばれる国の周辺で始まります。キリストの深刻な警告は、ダニエル書の預言と共に、北の軍事勢力によってエルサレムが侵略される事を示しています。

しかしイスラエルのユダヤ人は一部族に過ぎません。それはおそらく、他の二つのユダヤの部族レヴィ族とシメオン族に連なるものです。従属部族であるヨセフ族、エフライム族、マナセ族を合わせて、全部で１３の部族が存在しました。

ジェロボームの時代から独立した王朝と首都を有していた北の十部族は、ユダの捕囚よりもずっと前にアッシリアの王達に捕囚されました。紀元前７２１年から紀元前７１８年にかけて、その十部族は黒海とカスピ海の間の寒々とした大草原に姿を消したのです！ユダがバビロンに捕囚されたのは、約１７８年も後の紀元前５４０年になってからでした。

追放されたイスラム人の多くは二度とパレスチナへ戻る事はなく、川辺を沿ってヨーロッパやイギリス諸島へと移民したのです！

アブラハムの孫、ヤコブは度重なる神との遭遇の後、自身の名を「イスラエル」に改名しました。その詳細は上記の本に記されています。

ヤコブは１２人の子供を持ち、それぞれが大きな部族にその名を冠する祖先となりました。ヤコブは改名した時から「イスラエル」と呼ばれました。子供達の一人、ユダはシメオンやレヴィと一緒に 「ユダの家」と呼ばれるようになりました。一方でマナセ、エフライム、ガド、アッシャー、ダン、ナフタリ、ベンジャミン、ルベン、イサカル、ゼブルンは「イスラエルの家」を呼ばれるようになりました。この二つの家名が聖書で同じ様に使われる事は決してありません。この二つのまったく異なる王朝や領土、首都、言語、文化そして宗教などが詳しく書かれた本が現在４冊も在ります！

ユダの「ニックネーム」である「ユダヤ」が聖書で初めて使われた時、ユダヤ人はイスラエルと対立していました。

艱難に見舞われるのはイスラエルのユダヤ人のみならず

大いなる艱難は現在のイスラエルに住むユダヤ人だけではなく「ヤコブの家」また「イスラエルの家」にもやってくる事に注目して下さい。

「あぁ！それは他に類を見ない大いなる日だ。（マタイの福音書２４章１５節やダニエル書１２章１節の記述と完全に一致する比例無き時です）それはヤコブにとっても艱難の時だが、彼はそれから救われるだろう。」（エレミア書３０章７節）

大いなる艱難とは一体何なのでしょうか？それは恐ろしい近代兵器が飛び交う凄まじい戦争がもたらす何百万人の死、病気、飢饉、飢餓と言ったものです。それらはアメリカ合衆国、イギリス、カナダ、ヨーロッパ、オーストラリアや南アフリカ、そして、他の北西ヨーロッパ諸国に到来するでしょう。特に現在の「イスラエル」と呼ばれる国、つまりパレスチナにいるユダヤ人は多大な被害を受けるでしょう。

ティトス軍は先駆者でした

キリストの重苦しいオリブ山の預言をもう一度見てみましょう。教会とその建物や壁について彼はこう語りました。「これら全ての物が見えますか？はっきり言っておこう。一つの石もここで崩れずに他の石の上に残る事はないだろう。」（マタイの福音書２４章２節）その後、彼はこう続けました。「そして、この王国の福音は、あらゆる民族に（対する）証として、全世界で宣教されるだろう。そして終焉が訪れる。」（マタイの福音書２４章１４節）

キリストが死ぬ前は、福音は少数の者にしか教えられていませんでした。彼は謎めいた訓話で大勢に語りかけました。（マタイの福音書１３章１０－１７章）そして、弟子達にはまだ彼らが福音を理解する時ではないと説明していました。

キリストが弟子達に、パレスチナから散り地球の最果てまで福音を説いてくるよう伝えたのは、キリストが復活の後、弟子達の前に再び姿を現した時でした。（使徒行伝１章７－８節）

西暦７０年に到るまで、比較的少数の者達だけが神の王国の福音を聞いたことがありました。それは世界に証を立てる為に教えられたのでは決してありませんでした。それでもキリストは、荒廃をもたらす忌まわしき者の出現前に必要な勤めとして、これを伝え与えました。神は証無くして世界を見放したりはしません。神は決して誰にも、「でもあなたは教えて下さらなかった！」と嘆かせたりはしないでしょう。イスラエル家の十部族に全国規模の罰が差し迫った時もそうでした。神は、その破壊の前に何人もの預言者を遣わし、彼らの傲慢さや神への反乱、安息日の無視やそれにともなう偶像崇拝を、声高らかに指摘し警告しました。ユダにバビロニア軍によるその破壊が迫った時も、神は幾人かの預言者を遣わし、その事を警告しました。エルサレムのティトスによる破壊が差し迫った時も、キリストがその時代の人々にそれを警告しました。（マタイの福音書２４章）ですから、今日においても、神は全世界に警告を出し、証人を送っているのです！

多くのいわゆる福音伝道者達は、「甘い言葉を語り、嘘をつく」（イザヤ書３０章１０節）事で人々の泣き叫ぶ声に応えます。我々個人または集合的な罪を悔い改めなければ、我々の国々は世界戦争によって残酷な制圧を受けるだろうと、群衆に熱心に

語る者達がいったい何処で見られますか？週刊のテレビ放送や、国中の説教台、または宗教に関する書物のなかですか？

キリストは警告しました。「あなた方も悔い改めなければ、皆同じ様に滅びるだろう」と。（ルカの福音書１３章３節と５節）

ティトス軍のエルサレムへの侵攻で、何百万ものユダヤ人が虐殺されました。

しかし、その中の多くの者がキリストの警告を聞いていたのです。そればかりか、その後何年にもわたる神の忠実な使徒や使者達の警告をも聞いていたのです！彼らは悔い改める代わりにキリストを拒絶し、神の使者達を殺し、投獄しました。

（ヨセファスによると）非難しなさいという声を神殿で聞いたと言う大司祭と、それに続いてペッラへ逃げた数人のユダヤ人を除いて、その人口の大半が大虐殺を経験する事となりました。キリストの深刻な警告が現実のものとなったのです！

兵士達は教会の壁の頂上にある石さえも奪い取りました。教会は結局破壊されてしまいました。しかしキリストは、大いなる艱難のすぐ後に、目覚しい天の徴が現れるだろうとはっきりと言いました。

「大いなる艱難の後、太陽は陰り、月は輝きを失い、星（隕石）は天から堕ち、天の力は揺り動かされるだろう。」

「そしてその後、人の子の徴が天に現れるだろう。その時、地上の全ての部族は喪に服し、人の子が力と大いなる栄光を携え天の雲に乗って来るのを見るだろう。」（マタイの福音書２４章２７－３０節）

ゆえに、マタイの福音書２４章、マルコの福音書１３章そしてルカの福音書２１章の預言には２面性があるといえます。一つは典型として早い段階で実現するものであり、もう一つは、文字通り、最終的にの実現するものです。その住民が悔い改めない限り、エルサレムは再び破壊される運命にあるのです。

ティトス軍によりエルサレムが破壊された時、天に徴はありませんでした。キリストが全能の神の力を行使したり、天を揺るがしたり、太陽を灰の様に陰らす事はありませんでした。

ですから、もう一つ別のエルサレムの破壊がまだやって来るのです！荒廃をもたらす忌まわしき者の出現はその兆候と成るのです。では一体誰がこの忌まわしき者を生み出すのでしょうか？

ダニエル書の「小さな角」

バビロン、ペルシァ、グラエコ/マケドニアそしてローマの、代々世界を支配してきた４大国はダニエル書の２章と７章に記されています。これらの王国の中で最後まで残った国、ローマについて、ダニエルはこう結論付けています。「しかし、いと高き者の聖者らが王権をうけ、王国を永久に治めるであろう。」（ダニエル書７章１８節）

そしてダニエルはこう続けました。「その時私は、第四の獣（ローマ）の真実を知る事となる。それは他の獣と異なって、非常に恐ろしく、鉄の歯と青銅の爪を持ち、食らい尽くし、かみ砕き、残骸を足で踏みにじった。」

「その頭には十本の角があり、更に別の角（個別の「角」－政府または指導者を指す）が生え出たので、十本の角のうち三本が抜け落ちた。」（ダニエル書７章１９－２０節）

この預言は１０本の「角」もしくは政府が、同時多発的なものではなく、連続して現れるものである事を示しています。この「小さな角」は生えてきた「別」の角である事から、それが他の１０本の角に連なるものではない事は明らかです。

それについての記述に注目して下さい。「その（十本の）角を考察していると、もう一本の小さな角が生えてきて、先の角のうち三本はその為に引き抜かれてしまった（おそらくヴァンダルス、オストラゴス、ヘルリの事）。この小さな角には人間の様に目があり、また、口もあって尊大な事を語っていた。」

「なお見ていると、王座が据えられ、『日の老いたる者』がそこに座した。その衣は雪の様に白く･･･その御前から火の川が流れ出ていた。幾千人がその方に仕え幾万人が

御前に立った。裁きの準備が整い、帳簿は開かれた。」（ダニエル書７章８－１０節）

これは明らかにキリストの再来、千年統治の開始、そして最後の審判の日を指し示しています！しかし、この預言は他の１０本とはっきりと異なる「小さな角」の出現で始まっています。その角はダニエル書の第７章で、他の先の３つの角（または政府）を覆して（または引き抜いて）います。

ファウセットは述べます。「それが生えた後反キリストは身を起こす。初めは『小さい』が、１０本の内の三本を破壊した後、彼は他のどの角よりも強大になる。（２０－２１節）３つの角亡き後、その角は８番目の角になる。（黙示録１７章１１節を参照）他の７本よりも際立った頭を持っている。（**Critical and Experimental Commentary**、第４巻４２２ページ、 **emphasis mine** より）」

さて、「ロもあって尊大な事を語っていた」とはどういう事でしょう？

ダニエルは言います。「その獣には十本の角があり、更に一本の角（『小さい角』の事）が生え出たので、十本の角のうち三本が抜け落ちた。その角には（人の）目があり、また、ロもあって尊大な事を語った。これは、他の角よりも大きく見えた。」

「見ていると、この角は聖者らと戦い、そして勝ってしまった！」（ダニエル書７章２０－２１節）艱難の時代、聖者は「携挙され」地球に残されていないという説や、特別な「聖者」が洞窟に隠れているという説はなんと的外れな事でしょうか。これは文字通り、反キリストの力によって殺される最後の二人の証人（黙示録１１章７節）と教会の事（黙示録１３章7節）を指している事にお気付き下さい。

この「小さな角」は神の真の教会を迫害する勢力の類いを意味しているのです！

ダニエル書７章には、「小さな角」によって操られる４番目の獣（ローマ）の描写と共に始まる預言が四つあります。その小さな角は三つの連なる政府を覆し、終焉の時まで存続し、教会を迫害し、最終的にはキリストの再来時、キリスト自らの手で破壊されるものです。

言い換えれば、聖書は「小さな角」を、キリストの再来時に神の民を迫害している勢力または政府と識別する事で、それが現れるタイミングをも示しているのです。

さて、一体どんな勢力または政府がこの迫害を行い、神の従者の殉教の責任は誰にあるのでしょう？

「そして、彼（「小さな角」）はいと高き方に鋭い言葉を返し、いと高き方の聖者らを悩ます。彼は時世と法を変えようと企む。彼ら（聖者）はその手に落ち、一時（一年）、二時（二年）、半時（六ヶ月または半年）が経つ。（全部で三年半です）」

「やがて裁きの座が開かれ、彼はその権威を奪われ永遠に滅ぼされるだろう。」（ダニエル書７章２５－２６節）これは３年半のひどい迫害と殉教の期間を示しています！そしてそれは、艱難の開始からキリストの再来までを指す終焉の時の事なのです！

この「小さな角」は、時世や法を変える力を持った地位に座る、人間の指導者を象徴しているのです。

３年半

ダニエルは聖なる者がもう一人の者にこう聞いているのを耳にしました。「日々の犠牲と荒廃（荒廃をもたらす忌まわしき者）による破壊、そして、聖地が明け渡され、住む場所が踏みにじられるという、この予見は一体どれだけ続くのだろう？」

「そして、彼は私に言いました。２３００日を経て、聖地は清められるだろう。」（ダニエル書８章１３－１４節）

ですから、荒廃をもたらす忌まわしき者は動き出し、３年半もの間聖地を汚すのです！

ヨハネはこう記述しています。「そして、彼らは獣に力を授けた竜（サタン）を崇めた。さらに、人々はこの獣をも拝んでこう言った。『誰が、この獣と争う事が出来ようか？』」

「そして、彼には偉大な言葉と冒涜を吐く口（反キリスト、つまり偽の預言者である『小さな角』と同じ口）が与えられ、四十二ヶ月の間活動する力が与えられた。」（黙示録１３章４－５節）

反キリストが立ち上がり荒廃を開始した時、彼は３年半もの間それを続けるでしょう。

さらに注目して下さい。「それから、私は杖の様な物差し棒を与えられ、こう告げられた。立て、そして、神の神殿と祭壇とを測り、そこで礼拝している者達を数えよ。」

「しかし、神殿の外の庭はそのままにしておけ。測ってはいけない。そこは異邦人に与えられたからである。彼らは、四十二ヶ月の間、この聖なる都を踏みにじるであろう。」（黙示録１１章１－２節）

この３年半の間は、統率された福音の説教をする事は不可能です。神の教会は散り散りにされ、迫害されてしまいます。（アモス書８章１１節）殉教する者も居れば奇跡的に反キリストから守られる者もいるでしょう。

神はこう仰っています。「竜は、自分が地上へ投げ落とされたと分かると、男の子（教会）を産んだ女の後を追った。」「そこで、女には大きな鷲の翼が二つ与えられた。（神の奇跡の加護の象徴です。出エジプト記１９章４節を参照のこと）荒れ野にある自分の居場所へ飛んで行く為である。女はそこで、蛇から逃れて、一時、二時、そして、半時（三年半です！）養われる。」

「そして蛇は、口から洪水の様な水を女を追って吐き出し、彼女を押し流そうとした。」

「しかし、大地が女を助け、口を開けて、竜が口から吐き出した洪水を飲み干した。」

「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者達、すなわち、神の掟を守り、キリストの証を受け継ぐ者達と戦おうと出て行った。」（黙示録I、１２章１３－１７節）

ある者は、この「洪水」を歴史的観点から解釈しました。それは「小さな角」が神聖ローマ帝国を支配する期間の事であり、獣に跨る女のロから吐き出された、嘘で固めた教義、冤罪、そしてプロパガンダの「洪水」でもあるのです。

ある者はこれを文字通りに解釈しました。それは、サタンによって引き起こされる奇跡であり、紅海の例の様に、神の民はそこから救い出されると。それが何を意味するにしろ、サタンは神の教会の破壊に失敗するのです。

それでも神の言葉は、反キリストである「罪なる者」に率いられた大いなる偽の教会が、神の聖者達を酷く迫害するだろうと言っています。大いなる艱難には、多くの神の僕が殉教する事も含まれているのです。（マタイの福音書２４章９節と黙示録１３章７節）

全ての神の民が守られるわけではありません。二人の証人が良い例です。彼らは特別に、獣と偽の預言者に関する警告の為、神の最後の二人の預言者として任命され、反キリストと獣によって殺されます。

二人の証人は、荒廃をもたらす忌まわしき者が君臨する、「聖域の蹂躙」と時を同じくしてその使命を果たします。

「私は、自分の二人の証人に粗布を纏わせ、千二百六十日の間預言させよう･･･彼等には、預言をしている間ずっと雨が降らないように天を閉じる力がある。また、水を血に変える力があって、望みのままに何度でも、あらゆる災いを地にもたらす事が出来る。」

「そして、二人が証言を終えると、底なしの穴から這い上がった獣が、彼らに戦いを挑み、打ち勝ち、殺してしまうだろう。」（黙示録１１章３－７）

ある者は、教会全てが３年半の間「安全な場所へ移される」と思い込んでいます。それは明らかにありえません。二人の証人は神の真の教会に属してはいないのですか？彼らは「神の聖霊」によって導かれるが故に、霊的な「キリストの体」である教会のメンバーであるはずではないのですか?

それでも、神は二人の殉教を許します。

イスラエル人がゴシェンの土地にいる間、エジプト人とイスラエル人を「分け隔て」る為に、神がエジプトに疫病をもたらした時もそうでした。死の天使がイスラエル人の民家を「通り越し」エジプトの初子を殺して行きました。神はその時約束しました。「あなたの傍らに一千の人、あなたの右に一万の人が倒れるだろう。だが、あなたにそれが及ぶ事は無い。」（詩篇９１章１－９節）

囚われのイスラエル人は、彼らの恐ろしい艱難の最中、神に泣き叫ぶ形で描かれています。「さあ、我々は主のもとに帰ろう。主は我々を引き裂く事で、我々を癒し、打ちのめす事で、我々を団結に導くのだから。」

「二日（二年？民数紀１４章３４節とエゼキエル書４章６節を参照のこと）の後、主は我々を復活させ、三日目（三年目？）に、立ち上がらせて下さり、我々は主の見守る中生きるであろう。」（ホセア書６章１－２）

この預言はイスラエルの十部族への厳しい警告の中に見られます。特に、多くのヒントからイギリスと分かる、エフライムの国に対して。

神はこう言いました。「懲戒の日（艱難）エフライムは廃虚と化す。確かに起こる事を私はイスラエルの諸部族に教えた･･･私は立ち去り、自分の場所に戻っていよう。彼らが罪を認めて、私を尋ねるまで。彼らは苦痛の中早々に私を探しに来るだろう。」（ホセア書５章９－１５節）

この大いなる艱難、天の徴と（黙示録６－７章）主の日は、どれもがこの三年半の内に起こるのです！荒廃をもたらす忌まわしき者が動き始めてから「完結まで」または３年半後まで続くという事を覚えておいて下さい。二人の証人は３年半に渡って預言し、キリストの再来のほんの数日前に殺されるのです！聖域は３年半もの間「踏みにじられる」が、キリストの再来により「浄化される」のです！

これで良くお分かり頂けましたでしょうか。荒廃をもたらす忌まわしき者がいつ現れるのかに注意を配る事の大切さが。なぜキリストは、それが来た時にはユダヤ人に逃げるように警告したのかが。反キリストは何者かって？暴言を吐く人の口を持った、最後の「小さな角」とは誰の事かって？

それはとある教会の指導者である「偽の預言者」の事です！

大いなる偽りの教会のシンボルである獣に跨る女性

ここでヨハネの預言を見て下さい。「そして、この天使は私を霊体という形で荒れ野に連れて行った。私は、真紅の獣にまたがっている一人の女を見た。この獣は、全身至るところ神を冒涜する数々の名で覆われており・・・」（黙示録１７章３節）

女は教会の象徴として使われています。この場合は背教の教会、すなわち、神を冒涜する名に覆い尽くされた、淫らな女として描かれた、サタンの支配下にある教会の事です！「･･･七つの頭と十本の角を持っていた。女は紫と赤の衣を着て、金と宝石と真珠で身を飾り、憎悪やその淫らな身の汚れで満ちた金の杯を手に持っていた。」（黙示録１７章３－４節）

この、サタンに支配された大いなる偽りの教会は、世界中の王や大統領、首相と繋がりを持っています。それは、自らの政策を他の多くの国や文化に押し付ける、政治的な教会なのです。神はこういった行いを政治的淫行と呼んでいます！

更に、「･･･その額には、秘められた意味の名が記されており、それは、『大いなるバビロン、淫婦達や、地上の忌まわしい者達の母』というものであった。」とあります。（黙示録１７章５節）

これは偉大な母なる教会ですが、そこから出でた娘達は彼女に異議を唱えます！彼女は娼婦の様な服を着て、神を冒涜する名や肩書きを使い、謎に包まれた教義を教えます。

彼女の「謎めいた宗教」は、古代バビロンのものと同一で、それは、バビロンの謎めいた宗教と統一された都市や政府を築き上げた、セミラミスとニムロッドの時まで遡ります。

彼女の主なシンボルは太陽で、「イシュタール」（セミラミス女王を意味する）に奉げられた東に上る太陽にお辞儀をしています。「イシュタール」は今日では「イースター」と発音されており、神の安息日ではなく日曜日に崇拝されています。オーブや

球根の様な生殖を象徴する異教のシンボルの使用が認められており、その他、ユリやハエ、卵といった無数の古の異教の象徴を使用します。

彼女は常に神の真理と戦い、神の僕となった者達を虐げてきました。キリストとその弟子達によって、常にニサンの１４日の晩に行われた過越祭や安息日を、頑なに守ろうとした信者が何千人も殺されました。彼女についての更なる記述を見てみましょう。

「私は、この女が聖なる者達の血と、キリストの証人達の血に酔いしれているのを見た。この女を見て、私は大いに驚いた。」（黙示録１７章５－６節）

この章全体を読んで頂ければ、この大いなる偽りの教会が獣に跨り、御し、それに影響を与えている事がお分かりになるでしょう。彼女は獣を構成する最後の十国を結びつけるのを手助けするでしょう。ダニエル書の第２章に出てくる１０本のつま先の「陶土」は、彼女の影響力と教義の表れであり、それは十国を支配するであろう、強力な「鉄」の軍事国家とは相容れぬ、虚弱な結合要素でもあります。

では、この大いなる偽りの教会が黙示録１３章の二番目の獣と同一のものである事にお気付き下さい。

「私はまた、もう一匹の獣が地中から登って来るのを見た。この獣は、小羊の角に似た二本の角を持ち（それはキリストの様に見えた）、竜の様に喋っていた。（それはまるでサタンのようだった。黙示録１２章９節を参照のこと）」

「この獣は、最初の獣の代わりにその力全てを行使し（黙示録１３章に登場した最初の獣はダニエル書第７章に登場した４番目の獣と同一であり、それは初期のローマ皇帝達とローマの創立者ロムルスの時代から、後の「神聖ローマ帝国」の時代の支配者に至る帝国ローマを象徴しています。）、地とそこに住む人々に、致命傷を癒した最初の獣を拝ませた。」（黙示録１３章１１－１２節）

この致命傷は４７６年のローマ帝国の崩壊の事であり、その回復は、ローマ再興に貢献したベルサリウス将軍が、北アフリカで勝利を収めた５５４年に起きた事です。ここで注目して頂きたいのは、時世と法を変え、冒涜の名に満ち、神の聖者を

殉教に追いやった偽の宗教指導者「小さな角」は、その奇跡を起こす力をサタンから授かっていると言う事です。

「そして、彼は大いなる驚異を起こす。人々の目の前で天から地上へ火を降らせ、獣の加護による奇跡の力で地上の人々を欺く。彼は地上の人々に獣の像を作れと命じ、また、その像は言葉を話し（彼は「偉大な事を言う口」を持っています。）、その獣の像を崇拝しない者達は死ぬ事になると教えました。」（黙示録１３章１１－１５節）

その指導者が絶対正義を主張し、その教義を確立する為に「時世と法」を変える権力を振るう、世界規模の大いなる教会は、あなたの知る限り何処にありますか？謎めいた式典を謎めいたシンボルや謎だらけの大掛かりな儀式を用いて行う、多くの言語や国に跨る世界規模の教会はどこでしょう？地政学や、多くの国々の人々に対する政治的な選択に多大な影響力を持った、偉大で強力な政治団体でもある教会が在るのは何処ですか？

指導者達が淫乱を表す赤と紅色の衣を身に纏う偉大な教会があるのは何処ですか？その「永遠性」を誇示する教会があるのは何処ですか?

伝説にある「永遠の」街というのはどの都市でしょうか？「７つの丘」のあの街の事でしょうか？ヨハネはこう続けています。「七つの頭とは、この女が座す七つの丘の事である。」（黙示録１７章９節）彼はこうも言いました。「あなたが見た女とは、地上の王達を支配するあの大きな都の事である。」（黙示録１７章１８節）

歴史の中で「地上の王達」を支配してきたと宣言出来るのはどの都市ですか？明らかにワシントンではないし、ロンドン、ベルリン、東京やモスクワでもありません。では何処でしょう？その指導者が世界中の最も強力な政権保持者達に礼を尽くされ、政変をもたらし、革命を起こさせる様な大規模なデモやストライキ、反乱を奨励する力がある教会があるのは何処ですか？

この大いなる偽りの教会はイザヤ書にも記述されています。

「私は永遠に女王だ、とお前は言い、これらの事を心に留めず、その結末さえ考えなかった。」

「しかして今これを聞くがよい。快楽に浸り、安楽に暮らす女よ。心の中で、私は他に並ぶ者など居ない唯一の者であり（何という冒涜でしょう！これは神を意味する言葉ではありませんか！）、やもめになる事なく、子を失う事もない、と言う者よ。」（イザヤ書４７章７－８節）

他の者達に「母」と呼ばれる偉大な教会はどの教会でしょう？どの教会が、自ら出でた抵抗する娘達を持ち、彼女等を自身を持って取り戻すと誇示していますか？（彼女等は母と命運を共にする事になりますが。イザヤ書４７章９節）

ヨハネの預言はこの偉大な教会が、彼女の願いを叶える為に、その力をどの様に振るうかを示しています。「彼には、獣の像に命を吹き込む力があり、獣の像を話せるようにし、獣の像を拝まない者を皆殺させた。」

「そして、大小や貧富の差、また、その身が自由か奴隷かを問わず、全ての者に右手（協力、同意、意思、そして、奉仕する事への誓いの象徴）か額（類似思考、協力、受諾、そして、同意の象徴）に刻印を押させた。そして、その刻印か獣の名、または獣の名を表す数字を有する者以外の売り買いを禁じました。」

「ここで知恵が必要である。賢い者に獣の数字を数えさせなさい。数字は人間を指している。そして、数字は６６６である。」（黙示録１３章１５－１８節）

獣とは、ローマ帝国の時代から現代、そして、終焉の時にヨーロッパの中心で復活する不変の機関であるローマを指しています。それは、一つの偉大な宗教によって支配され、十カ国全てを操る力を持っています。

その「像」とは、ローマ帝国、主教管区、大主教管区、「コレギア」、または、「枢機卿会」等と同じ系統の建築物である教会の事であり、何の疑いも無く「ペテロの優位性」を主張する絶対的支配者なのです！

獣の「像」とは、教会の高さと影であり、その複製、コピーなのです。それでも、それは子羊の皮を被った宗教団体であり、竜やサタンの様に言葉を話します！

それに従うという事は、それを表す印やシンボル、または刻印を受け取る事を意味します。

したがって獣の像は、古代ローマ帝国の政治構成に基づいた、大いなる偽りの教会の団体なのです。それは多くの人達に、仮初にも神聖視され敬われる人の指導者を宿します（ローマの皇帝達は自分達を神または神聖なる者と主張しました）。それは儀式や信仰を謎に包んだ教会であり、世界中の政府に政治的影響を持つ、それこそ他の国の様に完全なる政治的支配権を有する国の様な教会なのです。

今なら、ひどく堕落した女に跨られた１０本の角を持った獣（「神聖ローマ帝国」と呼ばれる不変の組織の最後の復活体）と言う予見を理解して頂けると思います。

どのようにして偽りの教会は力を得たか

キリストによって創設された新約聖書教会では初めから（マタイによる福音書１６章１８節）内側からも外側からも（使徒言行録２０章２８－３１節）、神の真の教会から「ユダヤ」に関連する物全てを取り除こうという動きが見られました。

これは、大勢の異邦人が、古代の異教の伝統に固執したまま、喜んでキリスト教に加わった事が原因でした。

新約聖書、特にパウロが書き記しているものや、黙示録第２章と第３章の中の「教会への手紙」は、本来の信仰の侵食についての話です。つまり、割礼の概念を受け入れず、キリスト教ではなくユダヤ教の教えを改宗者に押し付けようとした、ユダヤ人からの攻撃にまつわる話です。（コリントの信徒への手紙**I**、１７章１８－１９節）

未だ若い新約聖書教会は、政府やユダヤ教の指導者、更には内と外からの背教者からの迫害に晒され続け苦しみました。

ガラテヤの信徒へ宛てたパウロの手紙には、彼らが「異なる福音」をこんなに早く聞き入れ、「異なるキリスト」に耳を貸した事への驚きが記されています。（ガラテヤの使徒への手紙１章６－８節）ポールはコリントの信徒を非難しています。彼らは異教徒の習慣に戻り、過越祭を酒まみれの騒々しい夜に変えたと。更に彼らが

集団内での近親相姦を大目に見ていた事にもふれています。パウロは絶えず、自分達の「ユダヤ人らしさ」を人に誇示する「偽の使徒」から自分の身を守ってきました。（コリントの信徒への手紙II、１１－１２節）

新約聖書の終わりから二番目のユダの手紙は、背教者の進歩の程を示しながら、真のキリスト教徒に「かつての信仰」に戻るよう訴えかけています。ユダの手紙は異教の信仰に戻った偽の教師に対する明確な警告です。彼等は、飲食や宴、乱交を宗教儀式に用い、その異教の巫女は「神殿の売春婦」としての役割を果たし、それは神との契りを象徴する行為であると主張しました。

およそ西暦９１年か９２年ごろ、ヨハネが黙示録を書いた時には、背教者達の勢力は完全に近いものとなっていました。

教会への手紙の第２章と第３章では、異教によって、教会が偽の教義、偽の宗教指導者、そして偽りの活動に蝕まれている様子を垣間見る事が出来ます。

使徒言行録第８章や他の記述は、この背教集団の最初の指導者と成るべくして現れたかもしれない男を描写しています。彼はローマの「ペトロ」を偽ったともいえる、魔術師サイモンと言う人です。その男の話は本１冊分ぐらいの調査を必要とするでしょう。しかし、男は過去に忘れ去られ、今では偽の預言者の前身として以外は、あまり関係のない者とされています。

パウロは育ちつつある背教団体についても書いており、偽の預言者はキリストの再来の直前の最後の数日間に現れる事を明らかにしました！

「誰がどの様な手段を用いても、騙されてはいけません。なぜなら、崩壊（背教の事です！）がまず起こり、破滅の申し子である人間の罪が暴かれる事無くして、その日（キリストの再来）は来ないのですから。」

「この者は、神と呼ばれたり拝まれるもの全てに反抗し、自らをそれらを超越した者であると息巻き、ついには、神殿（まだ建設されていないエルサレムの神殿です！）に居座り、自分こそは神であると宣言します。」

「･･･今なら分かるだろう。やがて姿を現すであろうその者を抑えている者が。（拘束または抵抗を意味し、パウロは膨れ上がっていく背教を「引き止めている」自らの事を語っています）」

「不正の怪しき力は既に働いている。（それは罪や不正を肯定する「怪しい」宗教の事でした。）ただそれは、今はいなして（抑えて）いる者が居り、その者は自分が排除されるまでいなし（抑え）続けるだろう。」（テラソニケの使徒への手紙II、２章１－７節）

ここで私達にも、エルサレムに身を落ち着け、自分を神聖だ！とか、神だ！と主張する人間の指導者の存在が見えてきます。

「排除される」という表現は、論争の的になる事があります。ギリシャ語の動詞、**ginomai** は「存在する」という響きがあり、パウロを指した抹消される者、または「排除される」と言う意味合いよりは、むしろ「その者が『存在する』と認識されるまでは」または「その者が何者であるか明らかになる」と言う方が意に沿った解読の仕方なのかもしれません。どちらにしろ、その意味するところは、パウロが初期の教会において、実質上背教全てに対する最後の抑止力の一つであったという事であり、彼の死後、東の世界でそれを生き延びる者は一人としていないという事です。

パウロの書もまた預言的なものです。なぜなら彼は、彼の死後数年の事のみならず、終焉の時の事まで記述しているからです。

徐々にではあるが、第一、第二世紀の教会は劇的に変わっていきました。そして少しずつ、異教徒の習慣が取り入れられていきました。教会を訪れる異教徒は、彼らと共に迷信や彼ら特有の様々な休日や祝日を持ち込みました。

更なる金や権力、信者を望んだ自由主義の牧師達が、それらの異教徒の習慣を許可し、「キリスト教の」ものとして仕立て上げました。権力に飢えた指導者の中には、人々に対して独裁的な権力を行使し、教会の物理的主権を牛耳る者もいました。ヨハネは権力を欲し、堕落した人の権力にその身を売った者を残して、正当な信者達を集会から「追い出した」「ディオトレフェス」について書いています。（ヨハネの手紙III）

過越際は復活祭に、安息日は日曜日に挿げ替えられました。クリスマスはキリストの誕生日を不明確なものにしました。西暦３２５年のニカイアの会議に至る頃には、真のキリスト教徒は安息日やニサンの１４日の過越祭を祝い、神に従い続ける事によって、「ユダヤ人化する事」に対し深刻な警告を受けていました。その代わりに、彼らは豊潤と性交の女神を敬う異教徒の祭り「イシュタール」を祝うよう命じられました。それは、多産のウサギと卵のシンボルや他の「神秘的な」用具を使った、春に行われる祝い事でした。

その時代から今まで、名ばかりの「キリスト教」の世界が大いなる異教の教会に付き従ってきたのです。数百万人の人々が「イシュタール」（イースター、と今日では発音される）をウサギと卵で祝い、東に昇る太陽を仰ぎ、「ホットクロスバン」（牡牛座、タンムーズ、またはニムロデを象徴する言葉**bous** または **boun** に由来）を食べ、「キリスト教」に仕立て上げられた異教の祝い事を楽しんでいます。

結果として、「キリスト教」を偽ったこの「謎めいた」異教の宗教に下った何百万という人々が、皇帝や王達に教会の力を認めざるを得ない状況を作り、彼らの支配権とおそらく命までも奪う事となったのです。

神の真の教会は政界に在らず

神は厳粛に警告しました。信徒は絶対に、このバビロンに由来する謎めいた宗教、それが示す興味や政治的な目的、戦争、または政治制度に関わってはいけないと。

「私はまた、天から別の声がこう言うのを聞いた。『我が民よ、彼女から離れなさい。その罪に加わったり、その災いに巻き込まれたりしないように。』彼女の罪は積り積って天に達しており、神はその不義を覚えておられるからである。」（黙示録１８章４－５節）

黙示録の１８章には、十国の獣の力が最終的に「その娼婦を嫌う」事となり、その偽の教会をことごとく破壊し、その無数の人々や幹部を死に追いやる事が詳細に記されています。神はようやく、神の信徒を迫害かつ拷問する、醜くよためく宗教という名の女を、最も深い神の怒りの杯をもって罰するのです！だから神は彼の

信徒に、「その女の疫病が移らぬように」、その謎めいた宗教を捨てる事を望んでおられるのです！

キリストは弟子達にこう言いました。「世があなた方を憎むなら、あなた方を憎む前にわたしを憎んでいた事を覚えなさい。」

「あなた方が世に属していたなら、世はあなた方をその一部として愛したであろう。だが、私があなた方を世から選び出したが故に、あなた方は世に属してはいない。だから、世はあなた方を憎むのである。」（ヨハネの福音書１５章１８－１９節）

彼の死と復活の直前に、キリストは御父に祈る際こう続けています。「私は彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。私が世に属していないように、彼らも世に属していないからです。」

「私は、あなたが彼等をこの世から取り除くのではなく、邪悪から守って下さるよう祈ります。」

「私が世に属していないように、彼らも世に属していないのです。」（ヨハネの福音書１７章１４－１８節）しかし、偽の教会はこの世に属しています。それは政府として機能する政的機関であり、その大使を全ての国に遣わしています。その指導者は常に王族や貴族、大統領や皇帝の機嫌を取る事で、彼等に受け入れられ、好かれ、そして彼らに影響を及ぼしてきました。

しかし、イエスは言いました。「私の王国は、この世には属していない。もし、私の国がこの世に属していれば、私がユダヤ人に引き渡されないように、私の僕が戦った事だろう。しかし、実際、私の国はこの世には属していない。」（ヨハネの福音書１８章３６節）

ヨハネはこう書き記しています。「世も、世にあるものも、愛してはいけません。世を愛する人がいれば、御父への愛はその人の内にありません。」

「なぜなら、肉体の欲、目の欲、命の驕りといったこの世のもの全ては、御父ではなく世に属しているからです。」

「そして、世は過ぎ去って行き、その欲望も･･･」（ヨハネの手紙I、２章１５－１７節）

「世」という言葉は制度の事であり、文明や共同体、都市や世界中の政府、そして、習慣や宗教、哲学的な概念を含めた社会そのものを意味します。

神の僕は、やがて来るキリストの天国の様な王国、神の政府の「市民」なのです！この世において、彼らは「旅人」の様なものであり（ペトロの手紙１２章９－１２節）、市民権を持たず、外国を旅している「見知らぬ者や巡礼者」の様なものなのです。

イラクを旅するアメリカ人が、イラクのイランやアメリカに対する戦争に参加しますか？アフリカを旅するイギリス人がアフリカの選挙に投票したり、アフリカ軍に入隊したり、部族の魔術やブードゥーの儀式に参加しますか？

ですから、神は彼の真の教会に命じます。「主の為に、人の法令全てに従いなさい。それが、最高権力者としての王であろうと、悪を行う者を処罰し、善を行う者を褒める為に、彼が派遣した総督であろうと。」（ペトロの手紙１２章１３－１４節）なので、神の僕は法への従順、権威の敬い、そして自由や政府への感謝といった模範を示す事になっているのです。神の裁判所と対立しない限り、彼らはそれらの政府に従う事になっています。

対立した場合、神の僕はまず神に従い、そしてその市民政府が課す罰を甘んじて受け入れるのです。

その昔、ペトロと他の使徒達は権威に対してこう言いました。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。」（使徒言行録５章２９節）

キリストの真の教会は決して政治組織になるようには意図されていませんでした。それは、キリストの「直轄の代弁者」と言い張り、地上に並ぶものは無く、キリストに次ぐ唯一の人間の指導者だと主張する、一人の男の絶対的な独裁に下るべきものではなかったのです！

これは偽の教会が犯した多くの冒涜の一つに過ぎません。自らにそれほど強大な力があると自惚れる者は、誰であっても神の機嫌を損ね、当然として自らの多大な愚かさの報いを受ける事となるでしょう！

ファウセットは述べます。「エンティオコス・エピファネスの様に、３番目の王国の反キリスト（ダニエル書８章）は神の仇敵であった。なので、神の相対因子である４番目の王国の最後の反キリスト（最後の「獣」の力）もまた然り。教会は異教徒とローマ教皇の横暴に耐えてきたが、改宗という迫害に未だ晒されている。彼は、ローマ教皇としてキリストの名を利用し、キリストに成り代わるだけでなく、「御父と御子を否定する」だろう（ヨハネの手紙**I**、２２章）。迫害はキリストの再来まで続く。（**Critical and Experimental Commentary**、第４巻、４２２ページ）」

この偽の預言者は彼の従者を絶対的な権威で支配します！彼の偽の教義に従う事で、彼等はキリストと直接の繋がりを持てなくなり、キリストを通じて御父と繋がりを持つ事も出来ないのです！彼の民は、彼の機嫌を取り、従順に徹し、疑わず、闇雲に従った場合のみ「身内」と考えられ、神と精神的な関係を持っていると見なされます。

この様に、この偽の人間の指導者は、聖職者としてのキリストの地位そのものを強奪しようと企んでいるのです。彼は何人たりともキリストを通じて神に直接近づく事は出来ないと教えています。彼等はこのたった一人の人間の指導者を介さなければいけないと！終いには、この偽の預言者の冒涜に塗れた余りある自尊心は、彼こそが「神だ」と主張する程に膨れ上がっていくでしょう！

ここで、獣の「像」たるこの大いなる偽りの教会が、神に選ばれし人々に、どの様にして大いなる艱難をもたらす共犯者となるのかを見てみましょう。

偽りの教会の「枷」

イザヤの預言は大いなる偽りの教会を艱難においての主要な加害者としています。つまり、イスラエル十部族の捕囚の事です。「私は自分の民に対して怒り、私の遺産を汚し、お前の手に渡した。」（イザヤ書４７章６節）

これは、自らを「諸国の女王」と称し、自分より出でた反抗する「子を失う事もない」と豪語する堕落した女、つまり偽の教会の事です。

ここには「携挙」は描かれていません。それどころか、キリストが預言し、全ての預言が明白に宣言している様に、艱難は聖者の殉教を伴うのです。（黙示録１３章７節とマタイの福音書２４章９節）

そしてこう続いています。「お前は彼らに憐れみをかけず、老人にも枷を負わせ、甚だしく重くした。」（イザヤ書４７章６節）

思い出して下さい。獣と偽の預言者は神の民の殉教と、イスラエルの十部族とユダの捕囚に加担するのです！

大いなる偽りの教会だけが神の民にその枷を負わせるのではない事に注目して下さい！「シオンに住む我が民よ、アッシリア人を恐れるな。たとえ、エジプトがした様に彼らがあなたを棒で叩き、杖を振り上げても、その日が来れば、聖別によってあなたの肩から重荷は取り去られ首の枷は砕かれる。」（イザヤ書１０章２４－２７節）

「聖別」とはキリストの再来を指しています。

イザヤはこう言う、「その日が来れば（キリストが訪れる終焉の時）、主は再び御手を差し伸べて、御自分の残りの民をお救いになる。彼等はアッシリアを後にする･･･そして、神の民の為に尊い道が示される。彼等はアッシリアを後にする。ちょうどイスラエル人がエジプトの地を出た様に。」（イザヤ書１１章１１－１６節）

しかし、イスラエルの十部族が紀元前７２１から７１８年にアッシリアによって捕囚された時には、聖書には誰も戻らなかったと記されています。古代アッシリアからは奇跡的な大脱出はありませんでした。その代わり、バビロンがアッシリアを支配下に置いた時、捕えられていたイスラエルの民は、自らを捕らえたアッシリア人と共にヨーロッパやスカンジナビア、イギリス諸島へと放浪しました。

彼らの大部分は歴史の中から姿を消しました。幾つかの手掛かりが残っており、彼らを見つける事は可能です、しかし、イザヤ書１１章に書かれている様な出来事はまだ起こっていません。明らかに、この預言はキリストの再来の時の事なのです。

ユダヤ人だけでなく、イスラエルの家の者、つまり現代のイスラエル人達は今いったい何処にいるのかって？彼等は古代アッシリア人を代表する現代のある国家と、偽りの教会によって捕らわれています。言い換えれば、イスラエルは獣の力と偽の預言者の捕らわれの身にあるという事です。

この偽の預言者とは、ダニエル書の「小さな角」の事であり、最終的にローマ帝国の最後の７本の頭を操る事となった政府の事です。

このダニエルの預言の「小さな角」とは、かつてローマを支配した三つの王国を覆した教皇制度の事です。その三国は一般的にパンダル族（西暦４２９－５３３年）と、４７６年のローマ帝国の崩壊か４９３年までオドアケルが率いていたヘルリ族と、４９３年からベルサリウス将軍が５５４年にカルタゴを奪還するまでの東ゴート族の事だと信じられています。

教皇制度の影響力は、それらの王国の討伐と、５５４年ごろのローマの「帝国復興」に欠かせないものでした。

そして今、大口を叩き「時世や法」（日曜を基盤とした暦や教義を定着させる事）を変えようと企んでいる「小さな角」は、その「獣」の残りの７つの頭を支配します。これらはいわゆる「神聖ローマ帝国」の連なった頭であって、それは第二次世界大戦下で、ヒトラーやムッソリーニによって弱い形で再生された機関と同じものです。

ムッソリーニは自分の政府を「神聖ローマ帝国」の復興と呼びました！ファウセットはこう認めます。「ローマ帝国は、自らをアレキサンダー大王の帝国に由来するものだとは言いませんでしたが、ゲルマン帝国は自分達を「神聖ローマ帝国」だと呼んでいます。」（**Critical and Experimental Commentary**第四巻４１９ページ **emphasis mine** より）「神聖ローマ帝国」はイタリアではなくドイツに由来するものだったのです。

「小さな角」によって滅ぼされた最初の３人の王でさえ「チュートン人（ドイツ人）」だったのです。

ヨハネは次の様な神託を受けました。「あなたが見た獣は以前は在り今は無く、やがて底なしの淵から這い上がり（サタンに由来する事を象徴的に表す「淵」）滅びに至るものである（ですから、これは最終的にキリストによって滅ばされる最後の獣なのです）。」（黙示録１７章８節）

大いなる偽りの教会の指導者は、聖書の偽の預言者であり反キリストなのです！

その男こそがダニエルの「小さな角」なのです。彼こそがテサロニケの使徒への手紙IIの中にあった「罪なる者」であり、「荒廃をもたらす忌まわしき者」が擬人化されたものなのです。なぜなら、その男こそが神の教会に居座り、自分が神であると冒涜的な主張をする者なのですから！

その獣の象、つまり偽の教会が、何百万人もの人達を誤魔化し騙す為に、奇跡を起こすサタンの力を持つ事となるという神の言葉を覚えていますか？

「やがて汚れ（「邪悪な者」）が現れるが、主はその者を御自分の口の吐息で殺し、降臨なされる際の輝きによってそれを滅されるでしょう。」

「その者の全ての力と徴、虚実や奇跡は、サタンのそれに纏わったものであり、」

「そして、猜疑心や不正を胸に秘めた者達は滅びる（滅びゆく）。何故なら、自分達が救われうるという真実の慈愛を受け入れようとしなかったからである。」

「故に、神は彼らが虚実を信じるように強力な幻覚をお送りになるでしょう…」（テラソニケの使徒への手紙II、２章８－１１節）

この偽の預言者は神殿の中に居座るでしょう。その男は自分が「神聖である」と主張するでしょう。その男は、何百万人もの人々が騙されるよう、甚だしい偽りの驚異や奇跡、そして怪しい「啓示」を示すでしょう。彼らはこの男をまるで「神そのもの」であるかの様に敬い「崇める」でしょう。

キリストが地上に再来され、まず始めに行われる事の一つは、この大それた、嘘つきで思い上がった、冒涜的な偽の預言者を破壊する事です。「そして、獣は囚われ（捕縛や逮捕）、それと共に、獣の加護の元で奇跡を偽装した偽の預言者や、彼に騙

され獣の刻印を受け取り、獣の象を崇拝した者達も囚われた。彼等は生きたまま硫黄の燃え盛る火の池に投げ込まれた。」（黙示録１９章１９－２１節）

注意すべき事

というわけで、まとめると、キリストは明確にこう語ったのです。「ひどい破壊と荒廃をもたらすこの神の冒涜者は」、彼が立つべきではない聖地に立つだろうと！

キリストがこれらの言葉を発した時、その教会はまだ健在でした。キリストの信奉者は、キリストが神殿のどの場所を意味したのかはっきりと知っていました。それは神殿のもっとも奥の、「聖地」と呼ばれる場所であり、神父が毎日供物を奉げた「聖地の中の聖地」でした。それは、最高司祭が年に一度の「贖罪の日」にのみ入る事が許された、ヴェールの後ろに位置していました。

パウロははっきりと言いました。「罪なる者」は神の神殿に居座わると。

しかし今日、エルサレムに神殿はありません。

しかし、熱狂的なシオン主義のユダヤ人がその神殿の壁に向かって行進し、他の「神殿」の建物に象徴的な礎石を置こうとした時、大きな国際摩擦が生じるのです！

アラブ人のユダヤ人に対する憎しみに燃えた敵意は、部分的に、新しいユダヤ教の教会を建てようとしてユダヤ人の右翼派閥が岩のドームやアル・アクサ・モスクを破壊しようとする意図に起因します。

そのような神殿が建てられた時は、この記事に書かれた最後の事象がすぐそこまで迫っているのだと覚えておいて下さい。

考えてもみて下さい。この様な出来事は他に例の無いアラブ諸国の結束をもたらすでしょう。中東で化学兵器や核兵器さえも用いた大きな戦争も起こり得ります。なぜならアラブ人は、彼等が最も敬いイスラム人全てにとって神聖な、モスクの内２つの破壊を目撃する事になるかもしれないからです。

彼等は前例に無い程の結束を固め、彼らの指導者はおそらくダニエル書１１章４０－４５節の「南の王」となるでしょう。

私達が「獣の」の力、またはヨーロッパ連合と考えている「北の王」に「圧力をかける」ために、このアラブの指導者はヨーロッパへのエネルギーの供給を止めるかもしれません。これは、ダニエル書１１章にある様に、早急な軍事的対応を呼び起こす事となるでしょう。

ヨーロッパに、おそらく「ヨーロッパ合衆国」と呼ばれるであろう十の連合国が見られた時。それが突然中東に介入した時。世界的な教会の指導者が、ヴァチカンをエルサレムに移し、「唯一の真の教会」をその誕生の地に戻すと宣言した時。彼がエルサレムは自治領または解放された国際都市となり、軍事介入から免除されるべきだと宣言し、それを保証する為に「自らそこへ赴いた」時。州の教会を含む主要な教会がその母なる教会へと帰属するという奇跡を見た時。その男が、何百万の人々が称賛するがままに、自らを「世界を核による破滅から救った者」だと、大それて自惚れた宣言をした時。彼がキリストの様に敬われ「神」の様に称賛された時。そんな時は「気を付けて」下さい！

なぜなら、これらの事象の存在は、大いなる艱難が「始まっている」ことを意味するからです！

もし、何百万人もの人々が口付けを交わし、ローマのペテロとされている、ビザンチンかギリシャ系の奇妙に黒ずんだ有名な銅像が神殿の内部に移され、彼が神殿の中に身を落ち着けた時、忌まわしき者の設置は完了し、想像を絶する恐ろしい「破壊」がすぐに始まるでしょう。

それがアメリカ人やイギリス人、オーストラリア人やカナダ人、南アフリカ人そして北西ヨーロッパの民主国へもたらす結末は想像さえつきません！

キリストが仰った様に、理解する心を持った人々を神がお救いになることを。
神が、あなた自身「気づいている」、人生において改善しなければならない事を成し遂げる力をお与えになることを。罪を悔い改め、キリストを救世主として呼び求め、

キリスト御自身の体、つまり精神的な依代とも言える彼の真の教会の一部となる力を、神があなたにお与えになることを！

キリストは言いました。「多くの者が呼ばれるが、選ばれる者は殆ど居ない。」神はあなたをお呼びになられましたか？あなたがこれらの証拠や警告の言葉に目を通したのはただの偶然でしょうか？それとも、神御自身があなたの人生を通して何かの目的の為に働いておられるのでしょうか？まだ時間がある内、考えそして祈って下さい、に。

— 終 —

この資料は、内容を改ざんせず、著者と出版社を明確にした上でなら、コピーして友人や家族に無料で配布する事が出来ます。一般大衆向けに出版する事は出来ません。

この出版物は個人的な探求の道具として利用されるよう意図したものです。どんな内容でも人の言葉をそのまま受け入れるのは賢明ではないという事を理解し、全ての事柄に関して、あなたはご自分で聖書に基づいて証を立てるようにして下さい。

ガーナーテッドアームストロング福音協会

私書箱　７４７Flint、テキサス　７５７６２

電話番号：（９０３）５６１-７０７０　　Fax:（９０３）５６１-４１４１

なお当福音協会のウェブサイトでは多くの文献が無料で入手できます。

www.garnertedarmstrong.org/

ガーナーテッドアームストロング福音協会の活動は、キリスト教徒とキリスト・キリストの教えに従って福音を説く、協力者からの自発的な十分の一税、奉納及び献金で成り立っています。